

財界貴公子と身代わりシンデレラ

プロローグ 身代わりの花嫁

昭和五十一年、秋。

都内でも最も格式ある神宮の一つで、近年稀に見る、盛大な挙式が行われた。

高砂席の緋毛氈の上にちよこんと座っている花嫁の名は、樺木ゆり子。

二十二歳で、春に大学を卒業したばかりだ。

傍らに座す新郎の名前は『齋川孝夫』という。

日本人ならば、誰もが名前を知っている『齋川グループ』のオーナー一族の御曹司だ。

小柄なゆり子は、そつと傍らの孝夫を見上げた。

孝夫は、どの角度から見ても完璧に整った顔立ちをしている。

優雅で気品に溢れた美貌の主だ。

普段から物静かな彼は、和の婚礼衣装を身に纏っていると、二十四歳とは思えないほど、大人びて威厳に満ちて見える。

百五十二センチのゆり子よりも頭一つ以上背が高い。

容姿、立ち振る舞い、引き締まった表情、身に纏う凛とした威厳……なにもかもが完璧だ。座り

姿勢もまったく崩れることなく、堂々としていて力強い。

水も滴るいい男とは、孝夫のような男性を言うのだろうか。

「どうしました？」

視線に気付いたのか、孝夫がかすかにこちらを向いて、低い声で問う。

「疲れたら言ってください。帯も打ち掛けも髪も、全部重いでしょ？」

「はい、ありがとうございます」

ゆり子はちらりと己の装束に視線を走らせた。

身に纏っているのは、お色直しで羽織った、金糸のきらめく素晴らしい打ち掛けである。

京都の人間国宝の作品で、ただお金を積みめば手に入るものではなく、縁のある名家に仲介を頼み、特別に誂えてもらった逸品と聞いた。

だが、なにより来賓の目を惹いているのは、髪を飾る絢爛な花々だ。

先ほど、四度目……最後のお色直しをした。

文金高島田に結っていた髪を解かれ、西洋風の結び髪に直されたのだ。

驚くゆり子に、美容師の女性は言った。

『最後のお色直しは、新しい時代を築く夫婦の姿にふさわしく……と奥様が仰いまして。素敵でしょう？ 日本髪でなくても、これほどにお美しく整うのですよ』

鏡で仕上がりを見たゆり子は、思わずため息を漏らした。

——こんな花嫁姿、見たことがない……なんて綺麗なの……

生花のブーケと、ダイヤモンドのかんざしで飾られた結い髪は、燃え立つような華やきに溢れていて、まさに新しい時代の象徴のように見える。

来賓の人々は、最後のお色直しを終えて現れたゆり子の花嫁姿にじよめいていた。こうして大人しく佇んでいるだけでも、人々の視線を絶え間なく感じる。

——装いは素晴らしいわ。問題は、花嫁衣装の中身である私……

ゆり子は旧華族、樺木家のお嬢様。

いわゆる『没落した名家の娘』である。

樺木家の当主はゆり子の伯母だ。ゆり子の母の姉が、婿を取り家を継いだ。

伯母と母は二人姉妹だった。

だが、母は若くして樺木家を捨て、英語の個人教師だった父と駆け落ちしたらしい。その後、父母は交通事故で亡くなり、残されたゆり子は伯母夫婦に、『養女』として迎えられた。

ゆり子が三歳のときだった。

——私は、実際には樺木家のお嬢様ではなく、居候……そして家が没落した今は家政婦だわ。

そう、本来ならば、この花嫁衣装を纏っているのは、樺木家の『本物の』お嬢様だった。

ゆり子は身代わりの花嫁なのだ。

樺木家には、小世という美貌の一人娘がいた。

小世に縁談が舞い込んだのは、二年ほど前のこと。

樺木家が斎川家に、政略結婚を打診したことが切っ掛けだった。

元華族の樺木家は、都心の一等地に『千本町』という広大な土地を所有している。のんびりした下町で、今でも旧樺木侯爵家の邸宅が残っている場所だ。

周囲は大都会なのに、千本町だけが別世界のようにレトロで、いまだに戦前の暮らしが残っているとされている。当然、日本の名だたる大企業は、千本町の土地を強く欲していた。

買収をオフア―してきたたくさんの企業の中で、一番の資本力を誇っていたのが、齋川グループだった。

伯父は小世を嫁がせることを条件に、千本町の売却を承知すると、齋川家に伝えた。

もちろん齋川グループからすれば、落ちぶれた華族の娘と、自慢の嫡男との縁談などお断りだったはず。できれば呑みたくない条件だったろう。

しかし齋川家は、小世の美貌と教養を評価し『こんなに素晴らしいお嬢様を、息子の嫁にお迎えできるなら』と、樺木家の申し出を呑んでくれたのだ。

小世が病気にならなかつたら、きつと様々なことがうまく行っていただろう。

樺木家は小世の結婚を切っ掛けに立ち直って、齋川家の縁戚として、まともにやり直していたかもしれない。

小世は、素晴らしい夫を得て、幸せな新妻として暮らし始めていたかもしれない……

そこまで考え、ゆり子はゆっくりと瞬きをした。

——全部、仮定。そんなのは夢。だって、小世ちゃんもういない。

一生分の涙はしぼり尽くしたと思っていたのに、また涙が一粒だけ零れた。

傍らの美しい花婿の姿をちらりと見上げ、ゆり子はそっと目をそらす。

孝夫は、小世の誠実な婚約者だった。

余命幾ばくもない小世との婚約解消を周囲に勧められても『人としてできない』と頑としてはねつけ、小世の入院費を支援し、小世と、彼女を看病するゆり子を励まし続けてくれた。

『体調が落ち着いたら、小世さんの負担にならないように工夫して式を挙げましょう。大丈夫。車椅子に乗ったままでいいですよ、俺が押しますから』

迷惑を掛けてごめんなさいと泣いて謝る小世に、あんな優しい言葉を掛けてくれる男性が、他にいるだろうか。

孝夫が誠実に小世を支え続けてくれて、本当にありがたくて嬉しかったのに……

——ごめんなさい……孝夫さん……

最後のお別れるとき、小世は、孝夫ではなく、別の男の写真を胸に抱いて旅立った。

小世に写真を持たせたのはゆり子だ。

孝夫への裏切りだとわかっていながら、小世の胸に、小世が恋した人の写真をしっかりと抱かせた。

あの悲しい別れから半年。

運命の歯車は大きく空回りして、孝夫の花嫁になったのは……ゆり子だった。

小世がこの世を去り、空中分解しかけた千本町の買収話をまとめるために、齋川家が仕方なく受け入れてくれた『身代わり』の縁談だ。

—— 歓迎なんて、誰からもされていない。でも、この結婚は自分の意志で決めたのよ。誰にも悟られないよう、ゆり子はそつと唇を噛んだ。

「なにか心配事でもありますか？」

ゆり子の頭上から、不意に静かな囁きが降ってきた。

驚いて顔を上げると、孝夫が真剣な眼差しでゆり子を見ている。

心配を掛けまいと、ゆり子は慌てて頭を振った。

ゆり子の潤んだ目に気付いたのか、孝夫は、形の良い唇をかすかに吊り上げ、優しい声で言った。

「大丈夫、俺がゆり子を守ります」

澄み切った秋晴れの空から、まぶしい光が差し、孝夫の美しい顔を照らした。

肌の滑らかさが一層際立ち、ゆり子は目を奪われる。

「孝夫さん……」

ゆり子の胸が、罪悪感と感謝と、不思議な温かさでいっぱいになる。

孝夫は、ゆり子が吐いた嘘のすべてを知りながら、助けの手を差し伸べてくれたのだ。

ゆり子はぎこちなく、口の端を吊り上げる。彼を困らせてはいけない。ちゃんと花嫁らしく笑っていないければ。

孝夫がふと、社交的な笑みを浮かべて、ゆり子に言った。

「ああ、首相の奥様がこちらにいらっしやるようです。奥様は着物がとてもお好きですから、ゆりさんの打ち掛けを間近でご覧になりたいのだと思いますよ」

離れた席から歩み寄ってくる夫人の目は、きらきらと輝いている。少し離れた場所に立ち止まり、ためつすがめつ、艶やかな打掛の柄を楽しんでいるようだ。夫人は最後に、ゆり子の斬新で気品溢れる結び髪に視線を移して、ほう……と満足げなため息を吐きながら、席に戻っていった。

ゆり子は頷き、孝夫に小声で尋ねた。

「首相ご夫妻の左隣の席は、出水製鉄の会長子息ご夫妻ですよ？ そのさらに左隣はポーランドの元副大使ご夫妻。今は外資系の製薬会社の重役をなさっていて……合っていますか？」

孝夫が形の良い目を睜り、口元をほころばせる。

「本当に、半月足らずで今日の来賓五百人を、全員覚えてしまったんですか？」

「はい。暗記は得意なので……」

「さすがです、噂通りの才女だ」

大袈裟な褒め言葉に、ゆり子は頬を染めて、小声で孝夫に反論した。

「わ、私は、学生時代『ガリ勉チビ』とか『メモガツパ』とひどいあだ名を付けられていて、さ、さ、才女なんかではありませんでした。ご存じでしょう、私の身上調査をなさったんですから」

孝夫は首を横に振り、ゆり子に微笑みかけながら、励ましの言葉をくれた。

「自信を持って。貴女は小世さんの自慢の『妹』でしょう？ 胸を張ってください。貴女は誰よりも綺麗です。花婿の俺が保証します」

力強い声に励まされ、ゆり子は勇気を振り絞って頷く。

—— そうだ。私は今日、最高の花嫁を演じるんだ……。弱気になっては駄目。

そう思い、ゆり子は精一杯の微笑みを浮かべた。
「はい、孝夫さん」

第一章 私の大切な人

昭和五十一年、二月。

病室の壁に掛けたカレンダーが、今日が節分だと示している。

大学四年生の榊木ゆり子は、二十一歳の冬を迎えていた。

――発病から、三百七十二日めか。緩和治療が変わって七十七日目。小世ちゃんは頑張っている。頭の中で計算し、ゆり子は唇を噛んだ。

ひな祭り生まれのゆり子は、あと一月で誕生日だ。

もうすぐ大学も卒業する。卒論は完成させ、単位も取り終えて、必須授業を消化しながら卒業を待つ立場だ。お陰で、小世の看護に時間を割くことができる。

ゆり子は顎のあたりで揃えた真つ直ぐな髪を耳に掛け、メモ帳をポケットから出した。

――そうだ、忘れないうちに控えておこうと……

小世の今日の様子、薬の量に変更があったかどうか。メモ魔のゆり子はひたすら書き込み続けている。

看護師がカルテに記載している内容だけれど、ゆり子自身も覚えておきたい。

彼女の具合にまつわるデータをいつでも確認できるように。

あとで不安になったとき、少しでも、安心の材料を見つけられるように……

――こんなにメモばかりしてるから、大学で『メモガツパ』なんて呼ばれたんだろうな。

メモを終えたゆり子は、横たわる小世の様子をうかがった。

幼い頃からゆり子の姉代わりだった小世は、二十三歳の頃から、もう一年入院していた。

回復の兆しは見られない。

衰弱はひどくなる一方だ。今はもう鼻から吸入する酸素を手放せない。

痩せ細った薬指には、婚約者から贈られた、美しいルビーの指輪が輝いている。榊の花のように鮮やかな赤だった。

「小世さん、次にお見舞いに来るとき、なにか持ってきてましようか」

ベッドの脇に置かれた椅子に腰掛けた、スーツ姿の男が言った。

背もたれのないパイプ椅子に腰を下ろし、前屈みになった姿が、絵に描いたように美しい。

こんなに容姿のいい男をゆり子は他に知らない。

男の言葉に、小世が思い出したように微笑んだ。

「そういえば、この前また幸太君がお見舞いに来てくれたの。プリンをもらったわ。久しぶりに食べました。全部は食べられなかったけれど、美味しかったなあ……」

小世の言葉に、男が端正な顔をほころばせる。

「俺の弟にしては気が利いていますね。では、冷菓子なら召し上がれそうですか？」

「ええ……そうね、ゼリーとか……久しぶりに……」

孝夫を見上げ、小世はそう答えた。

——小世ちゃんがか食べたいうって言うの久しぶり！

希望が見えた気がして、ゆり子は今の小世の発言をメモに書き付けた。

——小世ちゃんが、ゼリーが欲しいと言った。二月三日 十八時四十五分。

書き終えたゆり子の前で、男が立ち上がった。

「わかりました。明後日またお見舞いに来ます、そのときにゼリーをお持ちしますね」

告げた顔は、誠実そのものの笑顔だった。小世が彼を見送るために、身体を起こそうともがく。

ゆり子は慌ててメモ帳をしまつて小世に駆け寄り、痩せ細った身体を抱え起こした。

「ありがとう……ゆりちゃん……」

小世を支えながら、ゆり子は傍らの男を見上げる。

改めて間近で見ると、息を呑むような美貌の持ち主だ。

さらさらの黒い髪に、冷ややかに整っているのに、不思議な甘さを感じさせる端正な顔立ち。

——本当に、小世ちゃんにお似合いの、貴公子様だわ……

彼の名前は、齋川孝夫。

名門、齋川家の長男で、小世と同じ、二十四歳だ。

二年前にイギリス留学から戻り、齋川グループの関連企業で勤め始めたと聞かすが、若手社員とは

思えないほど落ち着き払っている。

孝夫は、周囲からそれとなく婚約解消を勧められても『闘病中の小世さんを失望させるような真似は、絶対にしない』と言い切ってくれた。

口先だけではない。自分で言ったとおり、週に一度は十七時半の定時に会社を上がり、勤め先から二駅先のこの病院に、小世を見舞いに来てくれる。

どうやら、とても朝早く会社に行き、定時に上げられるよう仕事をこなしているらしい。

お見舞いを終えたあと、また会社に戻って仕事をしているようだ。

孝夫は齋川家の御曹司という立場でありながら、小世のために貴重な時間を割き、常に気を配ってくれる。それだけ小世を大切にしてくれている証拠だろう。

ゆり子は、孝夫に対して、感謝してもし切れない気持ちを抱いていた。

「齋川のおじさまとおばさまにも、ご心配をおかけしますとお伝えくださいませ。あと幸太君にも」

ゆり子に支えられた小世が、か細い声で孝夫に言った。

「気を遣わないでください、うちの皆は、小世さんが元気になることを心から願っていますから」

孝夫は、形の良い口元に、礼儀正しい笑みを浮かべた。

「では、次にお邪魔するとき、道灌堂パーラーのゼリーをお持ちしますね」

孝夫が優雅な仕草で小世の手を取り、手の甲に口づける。

ここが病室であることさえ忘れさせる、映画のワンシーンのような光景だった。

イギリス留学を経験している上、幼少時には両親と海外を転々としていた孝夫は、時々外国の貴族のような振る舞いをする。

手の甲に接吻を受けた小世が、微笑んでゆり子を見上げた。

「ねえゆりちゃん、孝夫さんを、お見送りして……」

ゆり子はそつと小世の瘦せた身体を支え横たえさせて、孝夫に深々と頭を下げた。

「お忙しい中、小世ちゃんのお見舞いに来てくださって、ありがとうございます」

「気になさらないでください。俺も小世さんの変わりない様子を見に来られて安心しました」

優雅で気遣いに溢れた口調だった。そう言ってもらえてほっとする。

——齋川さんがいてくださらなかつたら、私一人では、小世ちゃんを支えきれなかつた……

ゆり子は伏し目がちに、心の中で思った。

主治医や看護師、ヘルパーは、一丸となつて小世を支えてくれる。

でも、ゆり子を支えてくれるのは、赤の他人に等しい孝夫だけなのだ。

——私のお父さんとお母さんは天国で、まともな親戚も、知り合いの大人もいない……頼れる人がいなくて、本当に辛かつた。齋川さんのお陰で、私は、とても救われたわ。

連れ立って歩き出すと、孝夫が静かに病室の扉を閉め、小さな声でゆり子に尋ねてきた。

「あの……小世さんご両親は、今日もお見えではないのですか？」

「……あ、あの、はい」

ゆり子は三十センチ近く背の高い孝夫を見上げ、ぎこちなく返事した。

伯父は壊れてしまった。元から気の強い伯母に振り回されている人だったが、樺木造船の倒産と、娘の余命宣告が立て続き、心身共に弱り切ってしまったのだ。

『夫』というストッパーが弱まったとき、伯母は誰よりも自分勝手な行動に出た。

樺木家が先祖伝来持っていた芸術品や、軽井沢の別荘や様々な特許を売り払つたのだ。そして自分の『お小遣い』にするためにそのお金は懐に入れてしまった。

小世の治療費にするのだと思つていた伯父とゆり子は驚愕した。

当時の樺木家は、経営する会社からの収入もなくなり、『千本町』にある小さな商店街からの家賃収入で暮らしていた。

だが自宅と、大都会の真ん中にぼつんと残つた下町『千本町』の分を合わせると、固定資産税は半端ではない額になる。

とくに土地評価額に見合わない千本町からの家賃収入のせいで、生活は苦しかった。

だが、伯母は家計に興味などなかったらしい。

伯母は驚くほど高価な宝石や着物を山のように買って着飾り『最近気詰まりなことが多いから、気晴らしがしたい』と家に寄りつかなくなつた。

財産をほぼ売り払い、千本町からの収入でやりくりしているのに、伯母の遊興は止まなかつた。

小世を見舞うこともなく、これまで付き合つていた上流の奥様達ではなく、怪しげな男達を侍らせて宴会だの旅行だのに勝手に出掛けるようになってしまったのだ。

伯父と違い、伯母は娘の心配など一切しなかつた。

どんどん露わになる伯母の身勝手さを、誰も止めることはできなかった。伯母と昼日中から、人目も憚らずいちゃいちゃと振る舞っている男達は……ゆり子の目にはまともな筋の者とも思えなかった。

確かに伯母は、四十なかばを過ぎてても、女優のように美しい。毒々しい深紅の薔薇のような美女だ。

男達にとつては伯母は金づるであり、玩具であり、上流階級への伝手として使える道具に過ぎないだろう。

大人しい入り婿の伯父には、立て続いた不幸に抗う気力はないようだった。

妻の身勝手さに憤る元氣もなく、妻の借金を返せと迫る人々に頭を下げては、なんとか小世の治療費を工面していた。家に戻ってこれられないのも、お金をかき集めるためだ。

一方、伯父に迷惑を掛け続けている伯母は、勝手に売り払った財産でかなりの金額を手にしてはたはずが、最近どうもお金すら使い果たしたらしい。

今では、勝手にゆり子の財布からお金を抜き、伯父がなんとか工面した小世の治療費までくすねていく有様だ。

ゆり子は惨憺たる樺木家の内情を呑み込み、小さな声で答えた。

「樺木は今……夫婦共に仕事で……」

「そうですか。会社の清算の件も、大変でしょうからね」

明らかに嘘とばれているだろうに、孝夫は話を合わせてくれた。きっと、ゆり子と小世に恥をか

かせまいとしてくれたのだろう。

「ご両親が忙しくて、小世さんはなにか困っていませんか？」

ゆり子の脳裏に、病室まで押しかけてきた借金取りのことが思い出された。

ほとんど身体も動かせず、酸素吸入に頼ってやっと息をしている小世の側に陣取り、ネチネチと小一時間『母親を隠したのではないか』と詰問してきたあの男。

ナスコールなんて押しやがったら、この女の酸素吸入器をうっかり脚で引っかけ壊してやる、と脅されて、凄まじい怒りを覚えたことを生々しく思い出す。

小世は気丈ににらみ返していたが、真っ青だった。衰弱しきった小世にあんなに怖い思いをさせてしまつて、可哀相で……

たまたま、主治医の田中が顔を出してくれなかったら、どうなっていただろう。

『なにを勝手に器具に触っている！ 誰だ、貴方は！』

部屋に入ってきた田中は異様な雰囲気にか付いたのか声を荒らげた。

小世の酸素チューブに脚を引っかけ、ニヤニヤしていた男は、医師の登場に慌て『彼女の父親に迷惑を掛けられているのだ』と言いつつ。これには脚が絡まったただけだ、何秒か外れるくらい、たいしたことじゃないだろう、と……

だが、田中は、愚にもつかない言い訳には、耳を貸そうとしなかった。

『彼女は病氣と闘っているんだぞ、あなたの相手をしている余裕なんか無い。今すぐ出て行け！』

小世の主治医の田中は、凄まじい怒声と共に一喝し、あの屑みたいな男を追い払ってくれた。

——のんびりした優しい先生が、あんな怖い声で怒ってくださるなんて……
だが、田中が本気で怒ったことが伝わったのか、債権者はもう顔を出さなくなった。伯母さえまともならば、小世にあんな思いはさせずにすんだのに。

かすかに歪んだゆり子の表情を気遣ってか、孝夫が優しい声で励ましてくれた。
「小世さんは、貴女への感謝ばかり口にしていきますよ。ゆりちゃんは私の本当の妹だって」

「はい、私にとつても……お姉ちゃんです……一生、ずっと……」

自分が小世を守らなければ。唇を噛むゆり子に、孝夫が尋ねた。

「どうしました？ なにか心配事が？」

「い、いえ、大丈夫です」

静かな廊下を歩きながら、ゆり子は小声で答えた。

「そういえば田中先生は、他の偉い先生と違って、小世さんをこまめに気に掛けてくださるようですね。患者さん想いの主治医で良かった」

ゆり子は、孝夫の言葉に深々と頷く。

「はい、本当に親身になってくださるので、安心して小世ちゃんを託せます」

その言葉に孝夫が微笑んだ。

「ゆり子さんも家に帰ったらゆつくり休んでくださいね、そういえば、大学のほうはどうですか？」

「もう、卒業前なのでほとんど授業もなくて……」

曖昧に答え、ゆり子は心の中で思った。

ゆつくり休む時間なんてない。

家に帰ったら、樺木家の家政婦としての仕事が山積みだ、と。

家政婦を雇えなくなつてから、ゆり子は伯母から山のような家事を押し付けられている。気の弱い伯父はなにも言えずオロオロしていただけだった。

あの家で必死に庇ってくれたのは、小世だけだ。その小世も、伯父の目を盗んだ伯母によく平手打ちされていた。厄介者の居候を庇う、頭のおかしい娘はいらないと……

——伯母様は、自分より若い女も綺麗な女も大嫌い。両方満たして『美人で聡明』と評判の小世ちゃんの場合は、自分の娘なのにととても憎いのよ……なんて人なの。

小世が入院してからは、伯母の態度は悪化する一方だ。

伯父が金策のために不在がちになり、母親を諷めようとする小世もない。

ストッパーがなくなつた伯母は『居候の厄介者』を公然といたぶるようになった。

だが、ゆり子は伯母に逆らわない。無駄な力を使わないためだ。

命じられたとおり朝四時に起き、最低限の力で家事と掃除をこなし、大学に行く。残りの力は、なにより大事な小世の看病に注ぐことにした。

——今日も心を無にして家事を終えよう。

そこまで思つたとき、病棟の出入り口の扉が見えた。

孝夫が足を止め優雅にゆり子に会釈する。

「見送って頂いてありがとうございます、ゆり子さん」

「齋川さんこそ、今日も本当にありがとうございました。お見舞い、小世ちゃんも喜んでます」
ゆり子の言葉に孝夫は微笑んだ。

「……そうだといいな」

孝夫は、結婚の予定をなにも変えないでいてくれる。小世に対しても『なにも気にしないで、無理なら何度でも式の日程は調整するから、貴女はゆっくり身体を休めて』と約束してくれた。

——小世ちゃんがせめて車椅子にずっと乗っていられるくらい回復したらいいのだけど……

表情を曇らせたゆり子の視界に、分厚い封筒が映る。孝夫が差し出したものだ。

「いつもの分です。預かってもらえますか」

身体を強ばらせたゆり子は、ぎこちなく腕を伸ばしてそれを受け取り、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます……」

孝夫が困窮した状況に気付いてくれたのは、数ヶ月前のことだ。

彼が『良かつたらこれを』と、封筒に入れたお金をくれたとき、安堵で腰が抜けそうになった。

——神様みたいな人って、本当にいるんだな……なにもかも完璧で、優しくて……

先月も、先々月も、ゆり子は孝夫にたくさんお金をもらった。

今では小世の治療費と、入院費、その他、小世にまつわる諸々の費用はほぼ、孝夫がゆり子に渡してくれるお金から払っている。このお金は絶対に伯母に見つかるわけにはいかない。

「足りなかつたらすぐに連絡をください」

孝夫の声音はとても優しい。恩着せがましいところなどまるでない。

孝夫がくれた『お見舞い』を手に、ゆり子は深く頭を下げた。

「本当に、申し訳ありません。お医者様への付け届けも、これで……払えます……」

震え声のゆり子に、孝夫が優しく言う。

「回診のたびに教授への付け届けがある、なんて、本当によくない習慣だと思いますけれどね……
少しでも小世さんを気に掛けてもらうためですから、今は目を瞑りましょう」

そう言って孝夫が長身を屈め、ゆり子の耳に囁いた。

「ゆり子さんも一人で悩みを抱え込まないようにしてくださいね。俺や田中先生になんでも相談して。俺も、できることはなんでもしますから」

ゆり子は、孝夫の申し出に無言で頷く。入院棟の区切りの扉に来たところで、孝夫が立ち止まった。

「ではまた明後日、ゆり子さんも身体に気をつけて」

孝夫はそう言って、片手を上げて去って行った。

——私にまで優しくしてくださいなんて、なんて器の大きい人だろう。伯母様にお金を使いこまれたときは、心が折れると思ったけれど、齋川さんのお陰で助かった。私、まだ小世ちゃんを守れる……

孝夫を見送り終えたゆり子は、もらった金額をその場で数え、メモ帳に控えて、小世の病室に駆け戻る。小世はぐったりと目を瞑っていた。

先ほど起き上がったせいで疲れてしまったのだろう。

「ありがとう……孝夫さんのお見送り……」

そう言つて、小世が見事なルビーの指輪を外し、ゆり子に差し出した。

——どうして、最近すぐ外しちゃうんだろう。前はとても気に入ってたのに、綺麗つて……

ゆり子は小世から指輪を受け取り、枕元のポーチの中に片付ける。

そして、孝夫から預かった封筒を小世の目の前にかざして見せた。

「あのね、小世ちゃん。斎川さんがお金を貸してくださったの。あ、もちろん、使った分は、私がアルバイトをして分割払いで返すから、気にしないで。もしくは結婚したら斎川さんにいっぱい甘えて、うまくチャラしてもらつてね」

冗談交じりに言いながら、ゆり子は封筒から抜いたお金を、小世の枕元のポーチの中に隠した。残りは自分のぼろぼろのポシェットの、隠しポケットにしまう。

財布に入れたら伯母に抜かれる。病院に無事に納めるまでは、このお金は守り抜かなくては。

小世のポーチと自分の隠しポケット、それぞれいくらずつにお金を分けたかをメモしたあと、ゆり子は明るい声で小世に言った。

「いつも通りに、一番偉い先生が回診にいらつしやったら、ここからお金を取つて渡してね」

小世はなにも言わずに微笑んだままだ。最近どんどん元気がなくなつてきて、ゆり子がなにを言つても笑つていただけになつた。

「もちろんそんなのいけないんだけど……この病院はそういうところだから、割り切ろう。ね？」
ゆり子の言葉を笑顔で聞いていた小世が、不意に小さな声で言った。

「……ああ、幸せ。私、今が一番幸せなんだわ……」

妙に達観した声音に、ゆり子の身体が強ばつた。

どうしたのだろう。何故急にそんなことを言うのか。

小世が幸せになるのは、これからののに……ゆり子はまだ諦めていない。小世を無理に励ますこととはしないけれど、心の中では絶対に小世が元気になると信じているのに。

ゆり子は唇を開こうとしたが、うまく言葉が出てこなかった。

「私は、ゆりちゃんをあの家から出してあげたい。あんな場所に置いておけないわ……」

小世が静かな、決意を込めた声で言った。

明日をも知れぬ病で苦しみ続けていても、小世はゆり子の『お姉ちゃん』なのだ。

昔から、必死にゆり子のことを庇つてくれた。

今もその愛情深さは変わらない。どんなに自分が苦しくても、ゆり子のことばかり心配している。

「私のことなんか、あとでいいよ……」

「だって、ゆりちゃん、貴女は私の宝物なのよ。宝物を放り出したまま行けないわ」

——行けないつて……どこに……？

ゆり子は不吉な言葉に青ざめた。

「え……急に、どうしたの……？」

小世は大きな目で真つ直ぐにゆり子を見つめ、静かな声で、言い聞かせるように告げた。

「ゆりちゃん、これからなにがあつても、貴女は幸せになつて……。私が貴女に抱いているのは愛

情と感謝だけよ。絶対にそれを忘れないで」

「なに言ってるの？ 小世ちゃん……急にどうしたの？」

ゆり子は身を乗り出し、小世の痩せ細った指を握った。

——嫌だよ、そんなお別れみたいな言葉。これから先もずっと一緒だよって言って……！」

喉元のどもとまで出かかった言葉を、ゆり子は呑み込んで、別の言葉にすり替える。

「小世ちゃんは、私のことなんかより、まず結婚式を挙げられるように元気になるう？ 齋川さんだって言ってくたさるでしょう、元気になるまでずっと俺が支えますって……」

ゆり子の言葉に、小世が優しい笑みと共に言った。

「……ねえ、ゆりちゃん、もう、七時過ぎよ。真つ暗だから帰って、危ないから」

優しい声に促うながされ、歯を食いしばっていたゆり子は、はっと壁の時計を見た。

もう、面会終了時間を五分も過ぎている。いつもは、受付の人に迷惑を掛けないうう、きちんと時間を守っているのに。

急いで病院を出なくてはと、ゆり子は立ち上がってコートを羽織はった。

「そうだね、遅くなっちゃった！ 明日も病院が開いたらすぐ来るね」

頷いた小世が、気付いたようにゆり子に言った。

「あ……そうだ、ゆりちゃん。明日、アルバムを何冊か持ってきてくれる？ お気に入りの写真を

何枚か、手元に置いておきたいの」

「わかった。じゃあね、小世ちゃん」

ゆり子は小世に手を振って、病室を出た。

廊下を急ぎ足で歩いていると、小世の主治医の田中とすれ違う。

ひよろりと背が高く、男前なのに身なりに構わない。髪は今日もボサボサだ。

初めて会ったとき、『田中良りょう』と言います。三十三歳、毎朝髪をとかすのを忘れず、言わなくても、見ればわかるかな？』と自己紹介され、小世は大笑いしていた。

——あら？ 先生は昨夜も当直で、今日の昼過ぎにお帰りになったのでは……？

多忙すぎる田中の身を案じつつ、ゆり子は足を止め、彼に声を掛けた。

「こんばんは、田中先生」

「やあ、こんばんは」

田中は足を止め、温厚おんこうな笑みを浮かべて挨拶あいさつを返してくれた。

「先生はまだお仕事なのですか？」

「気になることがあって、顔を出しただけなんです。本来は明日の朝までお休みなんですけど」

ここは、名門の私立医大附属病院だ。

偉い先生の中には、お金のない小世に冷淡な態度を取る者もいた。

けれど、田中は違う。患者さんは皆平等に見るから、付け届けは要いらないと言って、ゆり子が必死にかき集めたへそくりを断ったのだ。

田中は『将来、付け届けなんて制度は罰則対象になると思いますよ。僕は時代を先取りしているだけですから』と笑っていた。

たまたま応接コーナーで立ち話をした他の患者達も『田中先生は本当に素晴らしいお医者さんですよ。腕もいいし誠実だし』と、口を揃えて言っていた。

——でも、時間外にわざわざいらっしやるなんて……なんだか不安だわ。

ゆり子は田中の顔を見上げながら、恐る恐る尋ねた。

「気になることってなんですか？ 小世ちゃんの体調が悪いんでしょうか？」

怯えた顔のゆり子を安心させるように、田中は言う。

「いいえ、新しい薬は合ってるかなって。忘れ物を取りに来たついでにここに寄っただけです」

田中の答えに、ゆり子はほっとして頷いた。

笑顔の田中に頭を下げて、ゆり子は歩き出した。だが、その足取りがだんだんと重くなる。

——本当についてに寄っただけなのかな。小世ちゃんの具合、私が思っているより悪いんじゃない。

そう思ったら、足が止まった。覗き見は悪いとわかってはいるけれど、不安に突き動かされて、ゆ

り子は足音を忍ばせて小世の個室に向かった。

扉を開けようと躊躇ったゆり子は、わずかに開いた引き戸の隙間に耳を寄せた。

中から小世の声が聞こえる。

「もっと早く来て頂戴」

孝夫やゆり子に向けるのとはまるで違う、甘い、拗ねたような小世の声が聞こえた。

「また君はそんな我儘を。約束通りの時間に来ただろう？」

同じく、甘やかすような、ゆり子の知らない田中の声が聞こえる。

——え……？ 田中先生……？

ゆり子の頭が真っ白になる。

「……齋川さんや、ゆり子さんがいる時間帯には、来られないからね」

ゆり子の心臓が、異様な音を立てた。

自分が今耳にしている会話は、なんなのだろう。

ひとしきり笑い合ったあと、田中が切り出した。

「小世、あの……そろそろ、痛み止めを変えないか？ 夜も寝られないだろう、身体が弱ってしま

まうよ。量は僕がちゃんと調整するから」

「方が一にも、話せなくなるのは嫌なの。ゆりちゃんと、先生と、最後までずっと話したい。頑張るから、もうちょっと待って……」

すすり泣く小世の声に衣擦れの音が混じる。枕元に置いたパイプ椅子の位置を変えるような音が

して、小世の声が聞こえた。

「ねえ、私、痩せた？」

小世の声が不自然にくぐもって聞こえる。

まるで誰かにしっかりと抱きしめられているかのようだ。

「変わらないよ。大丈夫だ」

「……先生の言うことなら、信じるわ。最後まで、馬鹿みたいに信じる」

しばらく、会話が途切れた。どのくらい時間が経っただろう。田中の静かな声が響く。

「息苦しいだろう、やはり身体を起こさないほうがいい。横になろう」
ゆり子はなにも考えられないまま、息を殺して耳を澄ました。

「待って、先生……」

ゆり子は音を立てないように息を呑む。

「私……元気になれば、先生と一緒に逃げたい」

小世のすすり泣きを聞きながら、ゆり子は後ずさった。

違う、小世は元気になったら、孝夫の押ししてくれる車椅子で結婚式を挙げるのだ。そう約束してもらって、笑ってうなずいていたのに。

「うん……治ったら、必ず……」

主治医の田中は小世の身体のことをよくわかっている。治ったら、なんて言葉は、口にするのも心裂かれる思いに違いない。

ゆり子は激しくなる鼓動を誤魔化すため、慌ててコートの胸を押さえた。

足音を忍ばせて廊下を突っ切り、入院病棟の仕切り戸の先に出たあと、ゆり子は全力で走った。

そういえば、田中は最近、孝夫の前に姿を見せない。いつから見せなくなったのだろう。

——そうなんだ。小世ちゃんは、田中先生が好きなんだ。

じわじわと、実際に目に見た光景を心が受け入れ始める。

さつき、小世が『幸せ』と繰り返していた理由が、ようやくわかった気がする。

ぽうぜん 呆然と病院のロビーを歩きながら、ゆり子は小世の甘い声を反芻した。

小世はあんな風に、孝夫に甘えたことなど一度もない。

ゆり子の前だから照れているのかと思っていたけれど、いつも礼儀正しくて、距離を保っていた。

——そうだよ、ね、婚約してすぐに病気になっちゃって、斎川さんとはデートもしたことがないんだもの……好きとか恋とか、そんなの……なかったよね……

孝夫からもらった婚約指輪を、お見舞いの時間以外は外してしまう理由も、今更ながらにわかった。

田中の前では、孝夫にもらった指輪は外していたいからだろう。

一歩建物から出ると、暖かな病院の中と違って、外は凍えるほどに寒い。

小世には好きな人がいたのだ。人目を忍んでしか会えない恋人が。

ゆり子に漏らさなかつたのは、相手が自分の主治医だからだ。

田中はこの大学病院の優秀な医師であり、たくさんの患者を抱えている。

そんな彼が特定の患者と特別な関係になるなんて、許されない。

露見すれば田中の責任問題に発展する。誰かに知られたら、会えなくなるかもしれない。

その想いが、小世と田中の口を固く閉ざしているのだ。

寒いのに、ゆり子の頭は異様に熱く火照っていた。

『薬を強くしたらゆりちゃんや先生と喋れなくなる』

小世の言葉が脳裏に浮かぶ。

——ああ、小世ちゃん……斎川さんの名前……言ってなかった……

ゆり子の頬に、涙が一筋伝い落ちた。

小世の恋は、咲いてはいけない場所で、儂く咲いている。あんなに美しく優しい婚約者との間にはなく、道ならぬ道の路傍に……

ゆり子は孝夫に対して強い罪悪感を覚えつつ、ぎゅっと手を握った。

——黙っていなきゃ……小世ちゃんのこと、斎川さんに内緒にしなきゃ……

小世の幸せな時間が、一秒でも長く続いてほしいと心の底から思う。

あんな家で、娘をどうすれば高く売れるかとそろばんをはじき続ける親の下で、小世はゆり子を庇って、ずっとずっと冷たい傷ついた目をしていて。

婚約者の孝夫に対しても、優雅に振る舞いつつも、一步引いた態度を崩さなかった。そんな小世が、あんなに頼り切った甘えた姿を、田中の前では見せるなんて……

——小世ちゃんは先生が大好きなんだね。ちょっと抜けてるけど、優しいもんね、先生。

ゆり子の心にとてつもない悔しさが湧き上がる。

小世は歯を食いしばって生きてきた。なのに、どうして一番幸せなのが『今』なのか。

神様は意地悪だ。元気で綺麗な小世と、田中を引き合わせてくれれば良かったのに。

冷たい頬に、涙が流れた。

——斎川さん、本当にごめんなさい。でも私、小世ちゃんの気持ち……優先してあげたいです……ごめんなさい……

周囲からの破談の勧めもはね除け、一途に小世に尽くしてくれる孝夫。

ゆり子のことまで気に掛け、手を差し伸べてくれる彼を、ゆり子は今日から裏切るのだ。

——小世ちゃん、小世ちゃんは……私が絶対、守ってあげるから……

ゆり子を心から愛し、守ってくれた人は、小世だけだ。

伯母は、一度もゆり子の世話などしたことがない。

引き取った当初も、三歳のゆり子をほっぽ放置していたそうだ。泣いていても危ないことをしていても止めようともせずに。世話は家政婦に任せ、抱っこすらしなかったと聞いた。

ゆり子が大人になれたのは、二つ年上の小世のお陰だ。

幼い小世は、『さよが、おねえさんをします』と、常にゆり子の側を離れなかったそうだ。

昔勤めていた家政婦が『小世お嬢様は本当に小さい頃から賢くて、ゆり子さんが危ないことをしないように見張っていらしたのですよ』と、何度も話してくれた。

小世は、ゆり子が口に入れたものを器用に取り出し、縁側に出て行くゆり子を捕まえて、部屋に引っ張り戻していたらしい。家政婦達は皆、口々に小世の聡明さを褒めそやしていた。

——小世ちゃんは奥様にも旦那様にも似ず、本物の神童だったって、皆口を揃えて言っていたわ。私のことも、本当にちゃんとお世話してくれたんだろうな。

小世は、大きくなってからも、頻繁にゆり子の部屋にやってきた。

二人で一枚の布団にくるまって、お喋りをして過ごしたものだ。彼女が病に倒れるまで、いつもいつも、時間さえあれば二人で過ごしてきた。

ゆり子の人生は小世と共に在った。これからも、小世に側にいてほしい。

——三歳の頃から、小世ちゃんは私のお姉ちゃんなの……だから、絶対に私が守る。病院の敷地で嗚咽している若い女を、警備員が気の毒そうに一瞥して通り過ぎていった。

第二章 託された『花嫁』

昭和五十一年、春。

柔らかな雨が降る中、小世の葬儀が無事に終わった。重苦しい気分で、孝夫はあたりを見回す。

——ああ……桜が終わるな……

綺麗だった小世にふさわしい、美しく寂しい春の日。咲き誇る桜が雨に散らされ、白いカーペットのよう葬送の道を彩っていた。

小世の父親は放心状態だった。空っぽの声でゆり子に仕切りを任せてすまない、と言っている光景は見かけたけれど、この半年で十も老けたように思える。

無理もない。一人娘の命を救えず、家運を懸けていた『政略結婚』までもが破綻したのだから。

一方で母親のほうは、特に気にした様子もなく、それはそれで異様だった。

孝夫は、小世の母の喫煙姿から目を背けた。

周囲に気付かれないようにそっと振り返ると、喪服のゆり子は、血の気のない顔で足元を眺めている。手には古びたカメラを抱えていた。撮影する様子はない。ただ、持っているだけだ。

その傍らには、主治医の田中が立っている。

孝夫の姿が目に入っているだろうに、田中は、一度も声を掛けてこなかった。理由はわかっている。

三ヶ月ほど前、小世をアポなしで見舞いに行ったとき、見てしまったからだ。

小世を車椅子に乗せて屋上に向かう、田中の姿を……

白衣の田中は、『婚約者』の孝夫を一瞥し、無視して、笑顔で車椅子の小世に声を掛けた。まるで、恋人のように親しげな仕草だった。

——先生はあのとき、邪魔するなど言わんばかりに、はつきりと顔を背けて俺を無視した。車椅子を押されている小世は、孝夫がいることに気付かぬ様子だった。

背後から身を乗り出し、小世の顔を覗き込む田中の頬を撫でて、笑っていた。

あんなに幸せそうに、甘い笑い声を立てる小世を見たのは、初めてだった。

孝夫は二人に声を掛けず、足音を忍ばせて元来た道を引き返した。

田中を呼び止めなかったことは後悔していない。

もし声を掛けていたら、小世の最後の幸福を潰していたからだ。

残酷な男にならずにすんで、良かったと思う。

——あれで良かったんだ。俺は……間違っていない。俺の名誉よりも、小世さんが幸せに過ごせる時間のほうが大事なはずだ。田中先生も、俺に責められる覚悟だっただろう。

孝夫はため息を吐き、雨上がりの空を見上げた。

分厚い雲が裂け、まばゆい春の光が雨上がりの道を照らす。差し込んだ陽光は、まるで天国への階段のようだ。

けれど、小世がその階段を上っていく姿が浮かばない。

小世が何度も振り向き、足を止め、田中とゆり子を案じ、姿を捜しているような気がして、たまらない気持ちになる。

——俺と変わらない歳で、恋も叶わず……どうして……

孝夫は目を伏せて、黒い革靴のつま先をぼんやり見つめた。

普段は感情をコントロールできる自信があるが、さすがに今はかすかに涙が滲む。

同時に、小世との『約束』を思い出し、背にずしりと重いものがのし掛かった。

——俺は、大変なことを引き受けてしまったな……

最後の小世との面会が孝夫の頭に浮かぶ。

小世が昏睡状態になる数日前のこと。会社にいた孝夫は、小世の病院から電話を受けたのだ。

なにかあったのかと焦ってコールバックすると、電話をかけてきたのは、ヘルパーの女性だった。

小世から、伝言を頼まれたという。

『ゆりちゃんがないところで話をしたいから、明日の午前中に来てください』とのメッセージに、孝夫は急遽午前半休を取って、彼女の元を訪れた。

——なんの話だろう？ なにか深刻な問題が……？

だが、戸惑う孝夫の気持ちと裏腹に、小世はずいぶんさっぱりした表情だった。

『どうしたんですか、今日は急に』

笑顔で尋ねると、小世は横たわったまま、大きな目でじつと孝夫を見つめた。

『来てくださってありがとう。ごめんなさい、無理を言って。孝夫さんに見て頂きたいものがあつて』

小世はきやしゃな手を持ち上げ、枕元に置いてあつたアルバムを指さした。それだけの仕草でもとても辛そうだ。慌てて手に取ると、小世は言った。

『それ……私が撮った写真なの。ご覧になって』

顔いてアルバムを開くと、色あせた写真が何枚も目に飛び込んできた。写っているのは、どれも

小さな子供だ。おかつば頭につぶらな目で、とても愛らしい。

『ああ、これはゆり子さんですね。こんなに昔からカメラを触っていたのですか？』

驚いて尋ねると、小世はほんのりと笑った。

『ええ、私は写真を撮るのが好きなの。ゆりちゃん、昔から可愛いでしょう？』

『はい、可愛らしいです。貴女とゆりさんは姉妹のようだ』

孝夫の言葉に、小世はますます嬉しそうに微笑んだ。

『そう言われるの、とても嬉しい……』

本当にゆり子が大切なのだろう。愛情に溢れた優しい声に孝夫は目を細める。

『これは、オートタイマーで二人で一緒に写ったの……家の庭で……』

小夜が痩せ細った指で、一枚の写真を指した。椿の木の前にゆり子と並んでいるのは、今よりも

若い小世だ。セーラー服を着ている。

『小世さんは、この頃からお美しかったんですね』

『まあ、お世辞を言ってもなにも出ませんことよ……いえ、孝夫さんが私にお世辞を言う必要なんてないわね。今まで、本当にありがとうございました』

驚く孝夫に、小世は別人のように明るく言った。

『正直に言うと、病気になってしまったとき、婚約破棄されると思っていたわ』

『そんなことは……考えていません。貴女が大変なときに』

孝夫はやや歯切れ悪く答えた。

本音を言えば、孝夫は同情と親切心の狭間で迷いつつ、小世には優しい世界で最後の幸せを得てほしいと願っている。儂い安らぎくらいは、裏方として守ろうと……すべて、孝夫の自己満足だ。

強ばった顔の孝夫に、小世が優しく言った。

『私は、孝夫さんのことを、尊敬しています。だって……見逃してくれたから』

『見逃す？』

『私と田中先生が、貴方を差し置いて勝手に恋人を名乗り合っていることを』

はつきりと言いつつ小世に、孝夫は返す言葉もなかった。

——そうか、俺が気付いていることを、知っていたのか。

人ごとのように孝夫は思った。

『私、田中先生が好きなんです。馬鹿でしょう、こんな身体で、なにを言っているのかしら』

そう言つて、小世は骨の浮いた手で、小さな顔を覆った。その端から、一筋の涙が流れ落ちる。初めて小世の涙を見て、孝夫は動揺した。

『小世さん。泣かなくていいんです、俺は田中先生とのことを責める気なんてこれっぽっちも……』

慌てて手を外そうとしたが、小世は泣き顔を見せまいとするように抗った。

『私、貴方の地位目当てで、結婚しようと思っていたの。自分は一生恋なんかしないと思っていたから。相手なんて、お金があつて、人間性が良ければ誰でもよかった。私とゆりちゃんを人間扱い

してくれる。寄生先”を得て、家から逃げ出そうと……そう思つて生きていたのよ』

血を吐くような告解の言葉に、孝夫は絶句した。

『お見合いしたときに思ったの。孝夫さんはとても……いい人そうだった。孝夫さんなら、ゆり

ちゃんをあの家から連れ出す力を、きつと貸してくれるって、そう……思つて……』

——そうか、ゆり子さんのため……なのか。

孝夫の知るゆり子は、いつも古くてぶかぶかの服を着ている。

髪は自分で切り揃えたような、ざんばらのおかっぱで、手指はいつも荒れている。よくよく見れば息を呑むほど美しい顔立ちなのに、ポロポロの小さな痩せた姿しか印象に残らない。

ゆり子の姿を思い出していた孝夫は、続いた小世の言葉に今度こそ絶句してしまつた。

『孝夫さんとの縁談は、私が父に入れ知恵して、ごり押ししてもらつたの』

——入れ知恵……？

孝夫は、小世の意味ありげな言葉に眉根を寄せる。

『土地を売る条件に、私との縁談を入れて。私に孝夫さんの子供を産ませれば、お父様は、齋川家の後継者の外祖父になれる。日本指折りの大富豪と縁が切れなくなるのよって』
悲痛な声音の告白に、孝夫はなにも言えなかった。

賢い女性とは聞いていたが……その選択には、小世の幸せなどなにもないではないか。
孝夫は絶句する。小世が顔から手を離し、か細い声で言った。

『私、もつと写真を撮りたかった……あのカメラを持って、先生と一緒に、ゆりちゃんを連れて逃げたかったな……それで、新しい家に住んで、たくさん写真を撮るの。先生と植えた花とか、もつと可愛い格好をさせた、綺麗なゆりちゃんとか……たくさん……』

『……これからも……』
……撮れますよ。

だが、その安請け合いがどうしても言葉にできない。小世に残された時間はあまりにも短いという事実が胸に迫り、まともに声が出ない。

俯いて歯を食いしばった孝夫に、小世が言った。

『孝夫さん、お願い。ゆりちゃんを守って。あの子を私の実家から連れ出してください』

『え、な……なにを……？』

予想外の言葉に、放心していた孝夫は顔を上げた。

そんなことを言われるなんて、まったく想定していなかったからだ。

——ゆりさんを……？ どういうことだ？

硬直する孝夫の前に、小世はゆつくりと身体を起こす。そして、苦しい顔で孝夫を見上げた。

『孝夫さんは、聞いてくれるでしょう。だつて貴方は……善意の側にいたい人だから』

小世の声は、嗚咽を堪えるように震えていた。

孝夫の脳裏に、田中と小世の裏切りを許したときの気持ち、ふたたび生々しく蘇る。自分は、小世の言うとおりの人間だ。『善意の側』でいたいことを見抜かれている。

『お願いします、孝夫さん。母があの子をどんな目にあわせるかと思うと、死ぬに死ねなくて……』
無理矢理起き上がったせいか、小世が激しく咳き込む。

骨の浮いた背中をさすりながら、孝夫は看護師を呼ぶブザーに手を伸ばそうとした。その袖を、小世の指がぎゅっと掴む。

『私は、子供の頃から母が大嫌いだった……！ 自分が一番綺麗でいたい、そのために自分の妹をいじめ抜いて家から追い出してしまったような母なんて、大嫌いなんです。私、母のような人間になりたくない一心で、ゆりちゃんの優しい姉になろうとしていたの。ゆりちゃんのためじゃない。自分が嫌な人間にならないため……孝夫さんと同じなんです。私も、善意の側でいたかった』

小世が痩せ細った肩を波打たせ、話を続ける。

『ずつとうしろめたかった。ゆりちゃんは、なにも疑わずに私を慕ってくれたから。何回も何回も思ったわ。本物のいいお姉ちゃんになりたいって。そのためにも、ゆりちゃんをあの家から連れ出して、守ろうって。でも、もうできない……もう……できないのよ……』

涙を零す小世に掛ける言葉が見つからない。

どんな慰めも小世の心には届かないとわかるからだ。押し黙ったままの孝夫に取りすがり、小世がかすれた声で言った。

『お願いします、ゆりちゃんを助けて』

小世はぼろぼろ涙を零しながら、孝夫の目を見据えて言った。

『ゆりちゃんをあの家から連れ出してください。母は浪費が止まなくて借金を重ねているわ。それを帳消しにしてやるって言われたら、ゆりちゃんを借金のカタに差し出しかねないんです』

小世は苦しげに息を乱し、ぎゅっと唇を噛みしめる。真に迫った声音に、孝夫の血の気が引いた。すぐに頷けるはずがなかった。

——一人の女性の人生を預かる話なんて、軽々しく請け負えない。

握った掌てのひらに、深く爪が食い込む。孝夫の葛藤かたどちを見抜いたように、小世が言った。

『お願い……死ぬ前に、私を安心させて』

絞り出すような細い声が、孝夫の心をえぐる。

『善意の側』でいたければ、小世の期待を裏切るわけにはいかないのだ。

ゆり子を切り捨てた後悔は、生涯しよがいの孝夫の胸に残り続ける。

孝夫は歯を食いしばり、意を決して小世に誓った。

『わかりました。貴女にもしなにかあつたら、俺がゆり子さんをあの家から連れ出し、彼女の独り立ちを見届けます』

孝夫の答えに、やっと小世の表情が緩んだ。

『ええ……お願い……』

身体を横たえてやると、小世はかすれた声で『ありがとう』と言った。

先ほどまで瞳に宿っていた光は、もうどこにもない。まるで、力を絞り尽くしたかのようだ。

『小世さん、あまり興奮しないよう、ゆっくり休んでくださいね』

『孝夫……さん……ゆりちゃんのこと、お願いします……』

どうしても譲れぬとばかりに、苦しげに小世が念を押す。

『はい、約束します。小世さん。とにかく今日はもう、休んでください』

そう言うと、小世は心からほっとしたように微笑み、孝夫の目を見て言った。

『ありがとう……これから、孝夫さんに、いいことがたくさんありますように……』

——そんな、お別れみたいなことを言わないでください。

言いかけた言葉を孝夫は呑み込む。

『小世さん、お大事に。今度、もう少し詳しく話しましょう』

疲れ果てた顔で頷く小世に別れを告げ、孝夫は病院をあとにした。

……結果的に、あの日が、小世との最後の会話になってしまった。

翌日、孝夫は海外出張に発った。

父の名代としての出張で、要人との面談予定が多く、どうしても行かねばならなかったからだ。だが、ヨーロッパ各国の支社を歴訪れいほうしている途中『小世の意識が混濁こんたくしている』と連絡が来た。かなり難しい容態のようなので、と、電話を寄越よこした母は動揺していた。

孝夫の脳裏に、小世の最後の笑顔がよぎる。覚悟は決めていたものの、孝夫は動揺した。

——まだ早いでしょうか？ 貴女は俺と同じ年だ。こんなのは間違っている。どうか目を覚ましてください……それで……それから……俺は責めないから、本当に貴女が愛した人と……

それ以上は、なにも考えられなかった。

出張を可能な限り早く切り上げ、日本に戻った頃には、もう彼女は昏睡状態だった。

見舞いに付いてきた弟の幸太が、変わり果てた小世の姿に泣き出し、足早に病室を出ていった。

——ああ、そうか。もう、駄目なんだ……

全身から、吸い取られるように力が抜けていったことを今でも覚えている。

枕辺にいたゆり子が、赤く腫れた目で、孝夫に一通の封筒を差し出してきた。

『これ、小世ちゃんが書いたお手紙です……斎川さんに、つて……』

泣いているゆり子から渡された封筒には、手紙と、懐紙に丁寧にくるまれたルビーの婚約指輪、そして、折りたんだでのり付けされた厚紙のカードが入っていた。

『斎川の皆様。私、樺木小世は、孝夫さんとの婚約を破棄させて頂きます。私の病氣治療に多大なご支援を賜り、本当にありがとうございました。斎川の皆様のご厚情に、深く感謝申し上げます。孝夫さんのこれからの幸せを心より祈っております。ごきげんよう。樺木小世』

震えていても、教養の深さを示すような美しい筆致だった。

最後の一つは、開かない二つ折りのカードだ。ゆり子は小世から『中を見ず、のり付けして閉じて』と頼まれたらしい。

カードの表にはこう書いてあった。

『閲覧は孝夫様に限ります。父母がどうしようもないご迷惑を掛けたら、中を見てください。もしなにもなければ、父母のためにもこの紙はお捨ておきください』と書かれている。

なにが書いてあるのか想像も付かない。透かしても中に書いてある文字は見えなかった。

——よほどのことがない限りは、引き出しの奥底に入れたままにするのがいいんだろう。

最後の手紙を受けとった日のことを思い出しながら、孝夫はもう一度、鯨幕で覆われた樺木家の様子をうかがう。

葬儀が行われている当日だというのに、散らかったままの室内に、葬儀業者はなんとも言えない顔をしていた。弔問客にも、一部おかしな雰囲気のある者がいる。まともな客は彼らを避けていた。

——小世さんの言うとおり、ゆり子さんを……ここには置いておけませんよね。

樺木家の雰囲気は、孝夫が予想していたよりはるかに異様だった。

夫人がおかしな人間とつるみ始め、さらに借金を抱えたというのは本当のことなのだろう。

入り婿だという小世の父はただぼうつとしていただけだ。

妻が葬儀の席とも思えない高笑いを上げながら、怪しげな風体の男達と馴れ馴れしくじゃれ合っている、目を向けようともしない。

——まずいな、これは。

ただゆり子を、樺木家から連れ出し、新しい家に住ませ資金を援助するだけでは駄目だ。怪しげな男達が、真っ先にゆり子の居場所を探し出すに違いない。

——…なんとかゆり子さんと二人で話し合える場が設けられればいいんだが。だが『ゆり子と話せる場が欲しい』という願いは、とある呆れた申し出によって、あっさり実現したのだった。

小世の葬儀から半月ほど経った、土曜の夕方。

孝夫は友人からの食事の誘いを断り、居間でぼんやりと本を読んでいた。

心は通わずとも、小世は婚約者だった。回復してほしいと願い、手を差し伸べ続けた相手だ。その彼女が亡くなって、心にぽっかり穴があったような気がする。

ゆり子とは連絡が取れないままだ。樺木家に電話をかけても『お客様の都合により通話ができない状態です』と音声が行れるばかりだ。初めて聞いた。あれはどういう状態なのだろう。

——仕方ない、明日、線香を上げさせてくれと無理矢理樺木さんの家に行くか。だが、一度ゆり子さんと接触したら、余計に樺木夫人を警戒させかねないな。

必死で方策を巡らす孝夫の耳に、居間の扉が開く音が聞こえた。

「ただいま。幸太はどうした？ 今日も塾に行っているんだったか？」

居間に入ってきた父が、向かいの席に腰を下ろす。

「お帰りなさい、幸太は部活のあと、英語の塾に行きました。補講が山のようにあるそうで」

「幸太もお前と同じくらい勉強して、いい成績を収めてくれるといいんだがなあ……」

そう言つて、父はネクタイを緩め、大きく息を吐いた。しばらく沈黙が続く。

いぶかしげな顔になった孝夫に、父が言いにくそうに切り出した。

「実は、樺木さんに、ゆり子さんを小世さんの代わりにどうだろうかと打診されているんだ。娘がこんなことになったのに、非常識なお話をしているのは重々承知だと、そう言われてな」

父の言葉に、孝夫は、愕然とした。

かすかに青ざめた孝夫に、父が忌々しげに告げる。

「まだ、うちと縁戚関係となることを諦めたくないそうだ。ゆり子さんは、樺木のご当主の姪。妹さんの娘さんで、血筋には……少なくとも母方の血筋には問題は無いはずだと言っている」

あまり感情を露わにしない父の本当に嫌そうな顔が、本音をありありと表していた。

娘の件であれだけ譲歩してやった上、息子も私財でかなりの額を支援した。その上、さらに恩知らずな要求をしてくるのか。そう思っているのだろう。

「断ると、また千本町の売却が伸びる、あるいは他社に持ち込まれてしまう……ということですね」

父は薄く笑つて、孝夫を強い眼差しで見据えた。

「これ以上、千本町の買収を先延ばしにしたら余計なコストがかさむ。樺木さんの話を吞んで、縁談を受けよう。お前もそれでいいな？ なに、時期を見て離婚すればいい。土地を買ったあとは、樺木家との付き合いなどなんのメリットもないからな」

冷酷な言葉に、孝夫は思わず眉間に皺を寄せた。

「ですが、それはあまりに、誠意がない対応なのでは……ゆり子さんの人生まで、滅茶苦茶に……」
「もうこれ以上、新市街の建設計画も先延ばしにできないだろう？」
そんな馬鹿な話があるか、と言いたかったが、ぐっと堪えた。

ここで見合いの話を台無しにしては、ゆり子と話すチャンスさえなくなるからだ。

——小世さんの父上にしては強引な申し出だな。そもそも小世さんとの縁談も、自分の入れ知恵だと小世さん本人が言っていたのに。

不審に思った刹那、孝夫の脳裏に、ある考えが閃いた。

——もしかして……この縁談は……小世さんが死に際に、お父上に吹き込んだのだろうか？

小世の必死さを思い出すにつれ、おそらくそうだ、という確信が強くなる。

——もしそうなら……貴女はそんなにもゆり子さんを……

孝夫はため息を吐く。

小世は、ゆり子の笑顔を守りたかったのだ。親の手でおかしな男に売られて、手遅れになる前に。だから、無茶な話と知りつつ、あえて父親にこの話を持ちかけたのかもしれない。

孝夫はため息を吐く。同時に、道具のように扱われるゆり子がひどく気の毒で、心が沈んだ。



樺木家の二階にある使用人部屋で、ゆり子はカレンダーに目をやった。

昭和五十一年、八月十日。

小世がいなくなつて四ヶ月が経った。大学の卒業式のあと、しばらくして小世を見送つて、ゆり子の中にはもうなにもない。台所に行くにも涙が噴き出して、駄目だ。

——小世ちゃん、寝ぼすけのくせに、毎朝手伝いに来てくれたものね。

ゆりちゃんおはよう、とのんびりした声が聞こえ、台所の引き戸が開いて、小世が姿を見せる。

あの光景は、もう永遠に見られないのだ。ゆり子は、涙を拭いた。

その腕が痣だらけなことに気付き、ため息を吐く。

寝ている間に動き回つたせいでぶつかつたのだろう。

ゆり子は辛いことが重なると、寝ている間に歩き回つてしまう。初めて夢遊病のようになったのは高校の頃……伯母の当たりがきつくなつた頃だろうか。

昔は小世が気付いて布団に連れ戻してくれたが、今のゆり子は眠っている間、なにをどうしているやら。

先週など、廊下で目覚めたこともある。

そんな場所で眠りこけていられたのは、もうちっとも寒くないからだ。

——四ヶ月も経つたんだ。いつの間に夏になったの？ 私……なにしてたのかな……

机の上に投げ出されたメモには、乏しい全財産の内訳が書かれている。

毎日びつしり書いていたメモも、小世を見送つてからはほとんどなにも書いていない。

心がすつからかんなのだ。知りたいことも覚えておきたいこともなにもない。だから、必要最低

限のお金のことしか書けない。

——そろそろ、なにかパートに出ないと……電話、また止められちゃうな……
ゆり子は沈んだため息を吐き、メモ帳のページを繰り戻した。

小世が生きていた頃のことを、走り書きの数字や単語で、生々しく蘇る。
亡くなる前日のページには『今日も眠ったまま。田中先生が休憩時間、食事も摂らずに小世ちゃんに付き添ってくださった』と書いてあった。

——勇気を出して……田中先生の写真を撮らせて頂いて良かった。

通夜の前日、突然訪れてきて『写真を撮らせてください』と頼み込んだゆり子に、やつれきった田中は、どうしたの、いつも通りの声で尋ねた。

内面にどれほどの葛藤があっても、小世は彼の『患者』だった。

小世がゆり子にすら打ち明けなかったのは、田中の将来を守るため。

彼が責められることがないようにするため、必死に関係を隠していたのだ。でも……

『先生の写真を小世ちゃんの棺に入れたんです、お願いします』

涙をぼろぼろ零しながら頼むと、田中は絶句したあと、言葉少なに頷いてくれた。

『そうですか……ありがとう』

ゆり子は小世のカメラで、無理に笑っている田中の写真を何枚も撮った。一番うまく撮れたものを小世にあげよう。必死にカメラを構えて撮影する間、田中はゆり子に言った。

『樺木さんが、お通夜で寝ずの番をするんですか』

『……っ、はい……』

あの家に、他にそんなことをしてくれる人はいない。

伯父は心痛から逃れるためか、朝から酒を飲み続けている。ここ一年で別人のように老け込んでしまった。あの様子では夜中まで起きていられないだろう。

伯母は相変わらず風体の良くない男達とべったりだ。あの人にはなにも期待しない。

——小世ちゃん、私が最後まで一緒にいるからね！

しゃくり上げながらカメラを下ろすと、田中は疲れ果てた、優しい声で言った。

『僕は、今日明日が峠の担当患者さんがいて、長時間病院を離れられない。どうしても寝ずの番の時間に伺えないんです。だから僕の代わりにお願いしたいことがあります』

『なにを……ですか……』

『小世さんに伝言を。僕は君のあとは追わない、その代わり、君と同じ病気の人を千人治してみせるって。それをやり遂げたら、僕を迎えに来てほしいと伝えてください』

田中の声は、回診のときと同じ、優しい声だった。

彼は医者だから、明確に、小世がどうなるか予測して、ずっと早くから覚悟も決めていたのだろう。

田中はゆり子に背を向け、涙を隠すように、腕に顔を押し付けた。

『僕は本気で、彼女が好きでした。病が治ったら連れて逃げようと思っていました。……どうかしていますよね。医者 of 考えることじゃない……』

田中の言葉は、そこで途切れた。もう、なにも話せることはない、震える痩せた肩が語っていた。

ゆり子は急いでメモ帳を取り出し、彼の言葉を一言一句違わず書き留める。

がたがたの字で彼の言葉を控え、メモ帳をポケットに押し込んで、ゆり子ははつきりと田中に告げた。

『はい、先生の言葉は、小世ちゃんだけに伝えます……絶対に……小世ちゃんだけに言います！』

ゆり子は歯を食いしばり、部屋を飛び出した。

写真は特急料金で現像してもらい、お通夜に間に合わせる事ができた。

葬儀屋は小世を見て、『本当に美しい方ですね』と言ってくれ、生前のように化粧してくれた。

嬉しかった。自慢の『姉』だから。世界で一番綺麗な『姉』だったから……

小世の好きだった白のマーガレットも、葬儀屋が用意してくれた分だけでなく、自分のへそくりをかき集めて、たくさんの花屋を回って山のように買い込み、棺に敷き詰めた。

寝ずの番の夜には、懐にしっかりと田中の写真を抱かせ、何度も彼の言葉を聞かせることも

叶った。

メモ帳で彼の伝言を改めて清書し、それも小世の懐に収めて、冷え切った手を何度も撫でた。

『先生は明日のお葬式にはちゃんと来てくれるからね、大丈夫だよ、小世ちゃん……』

小世は、喜んでくれただろう。けれど、一つだけ後ろめたいままのことがある。

通夜と葬儀に来てくれた孝夫の顔を、まともに見られなかったことだ。

ゆり子を心配して、何度も『寝ずの番を交替します。少し休んできてください』と部屋の外から声を掛けてくれたのに。

小世の胸に抱かせた写真が見つかったら困ると思つて、素っ気ない返事しかできなかった。

——ごめんなさい……斎川さん……

葬儀の席で悲しんでくれたのは、孝夫と、彼の母と弟、それから幼い頃の小世を知っている、元家政婦達、最後の挨拶を言いに来てくれた病院の関係者だった。

——小世ちゃん……見守っていてね。私、頑張る、大丈夫だから。

伯父は、娘の死で折れてしまったのだろう。家に、伯母のとりまきの男達が上がら込むようになってからも言わなくなつた。

家にもいない。公園はどこかで、一日ぼんやり過ごしているのだろうか。

お金を使い果たし、借金を重ねた伯母は、買い込んだ着物と宝石を処分する気はないらしい。

その代わり、別のもの……つまりゆり子を処分して、新たに大金を得ようと思つたようだ。

『あれだけ綺麗ならうちの親分も満足する』

『小柄で従順そうな美人だな。あれなら高値を出す社長さんがいるぞ』

ゆり子は、伯母が連れてくる男達が大嫌いだつた。

頻繁にゆり子を値踏みする言葉が聞こえて来て、恐怖でどうにかなりそうだ。伯母は彼らに『姪が一番高く売れる相手を探してください』と甲高い声で愛想を振りまいている。

葬儀で頂いた香典も、全部伯母がこっそり抜き取つていった。もちろん気付いて取り返そうとし

たけれど、手に負えないくらい暴れられ、諦めた。

——私、この家に、身体の中から食い尽くされていくような気がする。駄目、呆けていないで、なんとかしなくちゃ……

歯を食いしばったとき、廊下の電話が鳴った。料金滞納で、しばらく電話が不通になっていたので、小世「きあと」の重要な事務連絡が滞っている。お役所や病院の会計課からの電話かもしれない。ゆり子は慌てて部屋を飛び出し、受話器を取る。

「はい、樺木でございます」

『ああ、ゆり子か』

ゆり子は反射的に眉をひそめた。酒を呑みに出掛けていた伯父からの電話だからだ。

『斎川さんが、小世の代わりにお前と見合いをしてくださるそうだ』

伯父の言葉にゆり子は強く眉根を寄せた。

「冗談……ですよね？」

ただ、その言葉しか浮かばなかった。伯父はどうとう壊れてしまったのだろうか。

『冗談のはずがあるか。そうだ、小世の振り袖があつたよな、あれを着ればいい。とにかく詳細は帰ったら説明するから！ ああ、良かった、良かった……』

電話は一方的に切れた。ゆり子は脱力したまま、無言で受話器を下ろす。

伯父が言う『小世の振り袖』とは、斎川家の厚意で、小世のために仕立ててもらった朱色の西陣の振り袖のことだ。

『ゆりちゃん、私、この色好きだわ、泳ぎ回っている金魚の気分になれてよ』

朱色の振り袖を纏ってひらりと回った小世は、愛らしくて、美しかった。

あのとき、小世の身体に巣くっていた病魔に気付ければ、運命は変わっていたのだろうか。

小世は田中に出会うこともなく、今頃は、優しく誠実な孝夫の妻になって、夫婦でゆり子に助けの手を差し伸べてくれたのだろうか……

狂ってしまった歯車を元に戻せたら、どんなにいいだろう。

自分に『小世が病気になる世界』に行ける魔法が使えたら……

そう思い、ゆり子はぎゅっと唇を噛みしめた。

九月の早朝。

お見合いの話が来てからほぼ一ヶ月後、孝夫との顔合わせの日がようやくやってきた。

——あちらは、乗り気ではないのね……：：～とか断って、千本町の買取案件だけまとめようと試行錯誤していらしたんだわ。

ゆり子は、広間で振り袖の着付けを終え、鏡をぼんやりと見つめていた。

「綺麗じゃないの！ これなら斎川さんも見直してくださるわ！」

伯母の顔には悲しみの欠片も見当たらない。ゆり子は小世がいなくて毎夜うなされるくらいに悲しいのに……。いたたまれなくて、ゆり子は目をそらす。